

暖かな日常

飛鷹 亜由美

「おはよう。」

そうってあなたは私の頭を優しく撫でてくれます。

春の日差しが舞い込む朝も

蝉がざわめく夏の朝も

木の葉が揺れる秋の朝も

粉雪が舞う冬の朝も

私の頭を撫でるあなたの手はとても暖かくて、とても愛おしい。

朝が弱いあなたは、2年前まで私に八つ当たりをしていましたね。

壁にたたきつけられた日もあったかしら??

気を失った私を抱きかかえて、病院に連れて行ってくれたのを覚えています。

それからあなたは乱暴することもなくなりましたね。

私が「起きて。」と声をかけると、優しくおはようと囁いて頭を撫でてくれる。

私はそれだけで幸せです。

毎晩、お仕事で疲れて家に帰ってくるあなた。

仕事場だけじゃ仕事が終わらないからといって、朝方までデスクに向かっていることも多くて。

私は少し心配になります。

休みの前の日は、毎回違う女性を家に招いていることもありますね。

こないだはキラキラとしたアクセサリーを身に着けた、少しケバイ女の人だった。

私は少し嫉妬します。

誰を家に招こうとも、あなたの帰りを大人しく待ってられるのは私しかいない。

そうわかっているから、ほんの少しだけ嫉妬。

私の想いは届いていますか??

私はいつもあなたが好きだと叫んでいます。

うまく声にならなくて、ただ鳴り響くだけ。

私はいつもあなたに触れたくて仕方ありません。

私には腕もないし、足もないから

自分の力であなたの腕の中に入っていくことができません。

あなたの温もりを感じられるのは朝だけ。

それでも私は幸せです。

私の鼓動が止まっても、あなたは「お前じゃなきゃ起きれないんだ。」
といて必ず治してくれるから。

だって私は目覚まし時計。